日韓仏教交流と高麗版大蔵経

―室町・江戸初期の大蔵経の活用を中心として―

ばば ひさゆき
馬場久幸
（佛教大学非常勤講師）

【要旨】

室町時代（朝鮮時代前期）の仏教交流は、高麗版大蔵経の交流であったと言えるほど、朝鮮半島から多くが日本に齎された。記録によると、日本側からの要請は65回にも及び、これに応じて朝鮮からは44蔵もの高麗版大蔵経が日本に伝来した。高麗版大蔵経とは、高麗の顕宗および高宗代に、契丹軍とモンゴル軍の侵攻を仏力で退散させようとして作られた大蔵経である。特に、高宗代に作られた大蔵経は、宋や契丹などの大蔵経と内容を校合している。日本では、江戸時代に浄土宗の忍澂（1645～1711）によって高麗版大蔵経の優秀性が説かれた。そうした評価により、近代において大日本校訂縮刻大蔵経（縮刷大蔵経）や大正新修大蔵経の底本として高麗版大蔵経が使われた。江戸時代以降、日本で高麗版大蔵経を活用した事例が確認されているが、室町時代での活用事例が見られない。

本発表では室町時代における高麗版大蔵経の日本伝来について焦点を当て、江戸時代初期までの活用事例を検討した結果、北野社一切経の底本として活用されていたこと、将軍誕生日祈祷で転読されていたこと、宗存が高麗版大蔵経を底本とし、さらに内容を校合して新たに大蔵経を刊行しようとしていたことなどが確認できた。

日韓仏教交流と高麗版大蔵経
—室町・江戸初期の大蔵経の活用を中心として—

馬場久幸

Ⅰ. はじめに

日韓の仏教交流は、欽明天皇13年（552年、壬申）10月に百済の聖明王（聖王）が使者を遣わし、仏像や経典を日本に伝えたことから始まる。それ以降、仏教の思想や文化が日本に伝来し、日本仏教の発展に貢献したことは言うまでもない。

こうした両国間における仏教交流の歴史の中でも、本発表で論じる室町時代（朝鮮時代前期）はとりわけ高麗版大蔵経（以下、高麗版と略称）の交流であったと言えるほど、朝鮮半島から多くが日本に齎された。記録によると、日本側からの要請は65回にも及び、これに応じて朝鮮からは44蔵もの高麗版（その中には中国版の大蔵経も含まれている）が日本に伝来した[1]。高麗版とは、高麗において顕宗および高宗代に、契丹軍とモンゴル軍の侵攻を仏力で退散させようとして作られた大蔵経である。特に、高宗代に作られた大蔵経は、宋や契丹などの大蔵経と内容を校合している。

江戸時代には、浄土宗の忍澂（1645～1711）が高麗版と黄檗版大蔵経とを対校し、その内容から前者の優秀性を説いた[2]。これによって、高麗版が善本であるという評価を受けるようになる。こうした影響は近代にも及び、大日本校訂縮刻大蔵経（縮刷大蔵経）や大正新修大蔵経の底本として高麗版（増上寺所蔵）が使われた。このように、近世・近代の日本仏教界において高麗版の果たした役割は大きい。

江戸時代以降、日本で高麗版を活用した事例が確認されているが、室町時代での活用事例が見られない。そこで、本発表では室町時代における高麗版の日本伝来について焦点を当て、江戸時代初期までの活用事例を検討したい。

Ⅱ. 日本に伝来した高麗版大蔵経

室町時代には44蔵もの高麗版が日本に伝来しているが、それらほとんどについては要請理由が不明である。そこで、最も多くの大蔵経を下賜された足利将軍家の事例（【表1】参照）から、一部ではあるがその理由について考察する。

足利将軍家の大蔵経要請は足利義満（1358～1408）の時代から始まるが、最初にそれを入手したのは足利義持（1386～1428）の時代である。その中で、大蔵経要請の理由について次のような内容が明示されている。太宗14年（1414）、朝鮮に渡った圭寿は国王（足利義

持）が先君の志を継ぎ、大蔵経と大般若経を閲覧する意志がある[3]旨を告げたという。世宗4年（1422）には、大蔵経を朝と晩に読み四恩に法答して三有に貢献するためであるとして要請している[4]。また、足利義持は大蔵経に留まらずその版木までも要請している。結局この要請は却下されたが[5]、彼の大蔵経に対する深い関心が窺える。

また、足利義政（1436～1490）の時代には8蔵もの大蔵経が下賜されているが、その中でも世宗30年（1448）に文溪正祐が日本国使として朝鮮に渡った際の理由として、王と臣下が高く恭慶する日本の第一禅刹である太平興国南禅寺が、文安4年（1447）に火災に見舞われ法宝（大蔵経）が焼失したために要請した[6]と記されている。

世祖2年（1456）には、足利義政の使者として承伝と梵準が朝鮮に渡り、美濃に殖福の道場として承国寺を創建し、そこに奉納するための大蔵経七千余巻を要請している[7]。承国寺がどのような寺院であるかは不明であるが、足利義政が東方の拠点として庇護していたと考えられる。世祖8年（1462）には、大和の天台宗寺院が兵火によって蔵殿まで焼失してしまい、この寺の再興に及び大蔵経が完備されていなかったために要請している[8]。

成宗18年（1487）には、北方殖福の地である越後の安国寺に大蔵経が完備されていなかったことから要請しているが、この時大蔵経は善隣の宝とされており、これ以上のものは無いとされた[9]。成宗22年（1491）には、筑前の妙楽寺に大蔵経がなかったため、それに加え大蔵殿建立の費用を要請している[10]。

以上、一部ではあるが、当時における日本側の大蔵経要請の理由について列挙してみた。これらからわかることは、寺院の創建や再興のために伽藍を整備し、経蔵を建立して大蔵経を奉納しようとしていたことである。美濃の承国寺や越後の安国寺は殖福の道場としての役割があり、大蔵経に何らかの願いが込められていたと考えられるが、具体的なことは不明である。

【表1】足利将軍家の大蔵経輸入

年代	将軍	大蔵経	出典資料	奉安先
応永18年 （1411）	足利義持	1蔵	『太宗実録』11年10月己酉条 『太宗実録』11年12月丁亥条	
応永21年 （1414）	足利義持	1蔵	『太宗実録』14年6月辛酉条, 『太宗実録』14年7月壬午条	
応永26-27年 （1419-1420）	足利義持	1蔵	『世宗実録』1年12月丁亥条 『世宗実録』2年1月乙巳条	
応永29年 （1422）	足利義持	2蔵	『世宗実録』4年11月丙寅/己巳条 『世宗実録』4年12月己亥/己巳条	
応永30-31年 （1423-1424）	足利義持	1蔵	『世宗実録』5年12月壬申/甲戌条 『世宗実録』6年正月戊寅/己卯条	相国寺
永享4年 （1432）	足利義教	2蔵	『世宗実録』14年5月庚辰条	

			『世宗実録』14年7月壬午条	
文安5年 (1448)	足利義教	1蔵	『世宗実録』30年4月壬午条 『世宗実録』30年8月庚辰条	
宝徳2年 (1450)	足利義政	1蔵	『世宗実録』32年2月辛卯条 『文宗実録』即位年3月己未条 『文宗実録』即位年5月己酉条	神祠
享徳1年 (1452)	足利義政	1蔵	『端宗実録』即位年6月丙子条 『端宗実録』即位年10月癸卯条	
康正2年 (1456)	足利義政	1蔵	『世祖実録』2年3月甲申条 『世祖実録』2年4月己酉条 『世祖実録』2年7月戊辰条	東州 承国寺
長禄1年 (1457)	足利義政	1蔵	『世祖実録』3年3月戊寅条 『世祖実録』3年5月戊子條	建仁寺
長禄3年 (1459)	足利義政	1蔵	『世祖実録』5年6月癸丑条 『世祖実録』5年7月丁亥条 『世祖実録』5年8月壬申条	美濃国神社
寛正3年 (1462)	足利義政	1蔵	『世祖実録』8年10月庚午条 『世祖実録』8年12月甲戌条	大和天台宗寺院
文明13年 (1481)	足利義政	1蔵	『成宗実録』13年4月丁未條 『成宗実録』13年4月丙辰条	円成寺
長享1年 (1487)	足利義政	1蔵	『成宗実録』18年4月乙未条 『成宗実録』18年7月丙午条	越後 安国寺
延徳1年 (1489)	足利義政	1蔵	『成宗実録』20年8月乙未条 『成宗実録』20年9月壬午条	般舟三昧院
延徳3年 (1491)	足利義稙	1蔵	『成宗実録』22年8月戊申条 『成宗実録』22年9月癸卯条	筑前 妙楽寺
文亀2年 (1502)	足利義澄	1蔵	『燕山君日記』8年1月壬申条	

Ⅲ. 室町時代の大蔵経活用の事例

1. 北野社一切経とその底本

北野社一切経は、応永19年（1412）に北野経王堂の覚蔵坊増範という僧が発願し、同年3月から8月までの5ヶ月という短期間に、東は越後・尾張、西は九州肥前・薩摩など、諸国の僧俗200余人の合力を得て勧進書写されたものである。

『北野経王堂一切経目録』[11]によると、応永19年に書写された経典は4,816帖、明応9年（1500）及び文亀元年（1501）の室町時代後期に書写された経典が82帖、慶長年間（1596～1

615）と元禄年間（1688～1704）に書写された経典が150帖あり、何度か補写されていることがわかる。

その底本は各経典に付されている千字文函号から判断して、ほとんどは宋の思渓版大蔵経（以下、思渓版と略称）と言われ[12]、『大般若波羅蜜多経』巻第531・532・533・534の巻末に「己亥歳　高麗国大蔵都監奉/勅雕造」という刊記が書写されていることから、この4巻だけは高麗版であると指摘されている[13]。

ところで、応永19年に書写された『大般若波羅蜜多経』の版式は、1行が14字詰である。このような版式を持った経典は珍しく、刊本の大蔵経では開宝勅版大蔵経、金版大蔵経、高麗版などがある。中でも高麗版は、室町時代に朝鮮から多数伝来していることから、その『大般若波羅蜜多経』を底本とした可能性が最も高い。そこで、北野社一切経に見られる高麗版との類似点について考察する。

1）北野社一切経『大般若波羅蜜多経』と高麗版大蔵経との類似点

北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』巻第531・532・533・534の4帖に書かれている刊記を高麗版と比較すると、両者ともに同じであった。

また、北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』巻第51には、「大般若第五一　第　張　宙」という柱題が書写されている[14]。高麗版は各張の前後どちらかに必ず印刷されており、「大般若」とは経典名を、「五一」とは巻数を、「張」は張数を、「宙」は千字文函号をそれぞれ示す。柱題が版木一枚ごとに刻まれていることも高麗版の特徴の一つである。そこで、高麗版の『大般若波羅蜜多経』巻第51の柱題を確認してみると、「大般若経第五一　第　張　宙」、「大般若第五一　第　張　宙」の二種類あったことから、北野社一切経の『大般若波羅蜜多経』の中で応永19年に書写されたものは高麗版の特徴と一致し、その底本は高麗版であることが確認できる。

2）『大般若波羅蜜多経』以外の経典

では、それ以外の経典についてはどうか。同年に書写された経典の版式はほとんどが1行17字詰であるが、一部には1行14字詰のものもある。その経典を挙げると次の通りである。

「衣」　『離垢施女経』

「可」　『大方広円覚修多羅了義経』上・下巻（400）

「曲」　『一字頂輪王瑜伽観行儀軌』（1320）、『大虚空蔵菩薩念誦法』（1324）、『仁王般若念誦法』（1322）（以上3巻1帖）、『仏説如幻三摩地無量印法門』（1450）（3巻2帖）、『仏説蟻喩経』（1451）、『金剛寿命陀羅尼念誦法』（1319）（以上2巻1帖）、『広釈菩提心論』（1449）（2帖）、『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』（1326）、『一切秘密最上名義大教王義軌』（1452）、『一字頂輪王念誦儀軌』一巻（1321）、『瑜伽蓮華部念誦法』一巻（1325）、『観自在多羅瑜伽念

誦法』、『聖観自在菩薩心真言瑜伽観行儀軌』（1327）

「衣」「可」「曲」は千字文函号を、（400）（1320）などは高麗版の通番（K番号）をそれぞれ示す。ところが、思渓版の目録（『増上寺三大蔵経目録』）で確認すると、千字文函号は一致している。また、千字文函号「曲」にある経典は、高麗版の順番とは異なっている。つまり、版式が1行17字詰の経典の底本は思渓版だろうと考えられるが、上記の版式は高麗版と同様であることから、これらの底本は高麗版であり、何らかの理由で混ざったと考えるべきであろう。

3）北野社一切経の底本の伝来

北野社一切経の中で応永19年に書写された『大般若波羅蜜多経』及び上記15部の経典は、その版式や特徴から底本が高麗版であると考えられる。高麗版は室町時代に日本に伝来しており、北野社一切経の底本となった大蔵経もその頃に伝来したと推測できるため、その時期について検討する。

北野社一切経書写の願主である覚蔵坊増範は、北野万部経会[15]の中心人物でもあり、足利将軍家との深い繋がりを持っていた。そのため、北野社一切経の底本となった大蔵経についても、その背景に足利将軍家の存在があったと考えるのが妥当である。

前述の通り、足利家将軍家で最初に大蔵経を入手できたのは、足利義持の時代である（【表1】参照）。即ち、太宗11年（応永18、1411）10月に日本国王（足利義持）と大内盛見が、使臣を遣わし土物などを献じて大蔵経を要請したが[16]、その2か月後の朝鮮側の返答は次の通りであった。

> 日本国王使及大内殿使人告還。土御経筵庁引見曰爾王示以究討劫掠梁霈之賊。予甚喜謝。使人対曰、吾王求大蔵経。乃命賜一部。[17]

朝鮮側は倭寇の討伐を喜び、その礼として日本国王使に大蔵経を与えていることがわかる。つまり、北野社一切経は応永19年3月から書写が始まっていること、その底本として使われた大蔵経の一部に高麗版が混ざっていること、足利将軍家と覚蔵坊増範の関係からこの時に下賜されたものが底本として使われたことなどが考えられる。

4）朝鮮経由の中国版大蔵経

北野社一切経の底本となった大蔵経は、高麗版や思渓版が混ざった混合蔵である。これは日本で混ざったというよりも、それ以前に朝鮮で1蔵の大蔵経として形成された可能性が高い。中国の大蔵経が朝鮮半島を経由し、日本に伝来した事例は他にも見られる。

①相国寺所蔵の大蔵経

相国寺の高麗版は、『大般若波羅蜜多経』600帖のみが元の普寧寺版大蔵経（以下、普寧寺版と略称）である。この大蔵経の処々に「花谷妙栄大姉之寄進也[18]」という墨書がある。花谷妙栄大姉とは陶弘房（？～1468）の妻であるから、大内領国内にあったことを示している。

②対馬西福寺所蔵の『大般若波羅蜜多経』

対馬の西福寺には、普寧寺版の『大般若波羅蜜多経』599帖が所蔵されている。この『大般若波羅蜜多経』は、泰定3年（1326）に高麗国門下省僉議賛成事であった趙璉が印刷を注文依頼したものである。それが、応永年間に宗貞茂によって対馬に伝来した。

③対馬妙光寺所蔵の『大般若波羅蜜多経』

対馬郷土資料館には、普寧寺版の『大般若波羅蜜多経』がある。これも西福寺同様、泰定5年（1328）に全州の戸長朴環の妻李氏が、息子の僧正正柔とともに自身の安寧と亡き夫の冥福を祈るため、銀泥を喜捨して経典の外題を銀字で書かせたものである。その中に高麗版が1帖混入しており、朝鮮時代に対馬に伝来したと見られる。

④園城寺所蔵の大蔵経

園城寺の普寧寺版は、延祐元年（1314）に星山郡の車氏が亡き父の趙文と祖母の冥福と国泰民安を祈って大蔵経1蔵を印行したもの、至正年間（1335～1367）に通直郎典校寺丞李幺升とその妻咸安郡夫人尹氏が、亡き両親の冥福と自身及び一族の福智増長を願って大蔵経を印行したものとが混ざり1蔵になった。但し、この大蔵経の『大智度論』巻24と巻39は、高麗版である。

室町時代に日本に伝来した大蔵経の中には中国のものも含まれているが、同じ経典が重複していないことから、不足分を補うため意図的に混在させ1蔵として作り上げたようである。混合蔵かどうかは不明であるものの、日本側の要請に応えるため朝鮮各地の寺院から掻き集めてようやく1蔵の大蔵経を形成して与えている事例が見られ[19]、日本に伝来した後に1蔵となった可能性よりも、朝鮮で1蔵を作り日本側に下賜したと考えるのが妥当である。このように、室町時代に朝鮮から伝来した大蔵経が北野社一切経の底本として使われたことは、その活用事例を示す一例として興味深い。

2．将軍誕生日祈祷と大蔵経の転読

禅宗寺院では室町時代、祝聖・修正看経・修懺祈祷・将軍誕生日祈祷・善月祈祷など、数多くの祈祷が室町幕府の命によって催されていた。当時これらの祈祷を行っていた寺院は、南禅寺・天龍寺・東福寺・万寿寺・真如寺・安国寺・臨川寺などであり、五山・十刹

の制の下、特に京都に位置する寺院であった[20]。

これら祈祷のうち、将軍誕生日祈祷がいつ頃から始まったのかは定かでないが、鎌倉時代には九条家と関係が深い東福寺で行われており、『観音経』・『金剛経』などが読誦されていた[21]。これが室町時代になると、足利将軍家を中心に大規模な行事として執り行われるようになる。

室町時代に行われたこの祈祷は、将軍の誕生を祝い、毎月の誕生日と年に一度の正誕生日に各寺院で挙行されていた。祈祷日の数日前になると、蔭凉職が対象寺院に対して通告を行う。通告を受けた寺院は蔭凉職に出向き誕生疏を受け取る。これに寺院の責任者が署名して将軍に献上する。集まった誕生疏に将軍名が書かれると、寺院はそれを受け取りに再び出向くという仕組みであった。蔭凉職が誕生日祈祷を通告する対象は、五山を含む有力な寺院だけであり、そこから塔頭寺院や末寺に連絡が行くようになっていた。

誕生日祈祷を行う寺院は、毎月疏を献上する寺院、正誕生日にだけ疏を献上する寺院、疏を献上せずに祈祷だけを行う寺院の三つに分けられていた[22]。この祈祷は相国寺とその塔頭、南禅寺とその塔頭[23]、建仁寺、東福寺、万寿寺、等持寺、鹿苑寺など五山を含む京都の寺院を中心に行われていたが[24]、近江・摂津で疏を献上した寺院も存在する[25]。

将軍誕生日祈祷に関しては、京都から遠く離れた地方の寺院が疏を献上したという記録が見られないため、畿内の寺院だけで挙行されていたという見解がある一方[26]、五山・十刹・諸山の制が全国的に確立していたため、全国規模で行われていたという見解もある[27]。

では、この頃の将軍誕生日祈祷では具体的にどのようなことが行われていたのか。これについては、『満斎准后日記』応永29年（1422）2月11日条に「十一日　己亥。天晴。少雨。於相国寺一切経転経在之云々。御所様明日正誕生日也[28]」、さらに応永30年（1423）2月11日条に「今日於相国寺一切経転経在之。御所様昨日正御誕生御祈[29]」という記録がある。これは、応永29年と同30年に相国寺で行われた誕生日祈祷の記録である。この時の将軍は足利義持であり、かつ誕生日が2月11日であることから、彼の誕生日祈祷であることを示している。その際、一切経、即ち大蔵経を転経して将軍の誕生日を祝ったということがわかる。

誕生日祈祷とは、中国では皇帝の誕生日を祝う聖節の応用であり[30]、国王の寿命無窮を祝祷する祝聖としての意味を持つ。但し、ここでの対象は天皇ではなく、室町幕府の将軍である。夢窓疎石の『夢中問答』には「祝聖は皇帝のためだけでなく四海清平・万民安楽のためにする[31]」とあるように、誕生日祈祷は単に将軍個人の誕生日を祝うだけでなく、国家を中心とした護国祈祷であったと考えられる。義持の時代の記録がこれしか見当たらず詳しいことはわからないが、特に正誕生日には盛大に執り行われたであろうと推測される。

五代将軍の足利義教（1394～1441、誕生日は6月13日）の時代も、「御誕生本尊頂戴。疏御銘奉書之[32]」という記録があり、将軍の下に誕生日の疏が集められていることから、誕生日祈祷は続いていたと見られるが、その詳細については不明である。

八代将軍の足利義政（誕生日は1月2日）の時代にも引続き祈祷が行われていた。『蔭凉軒日録』寛正5年（1464）1月2日条に、「御誕生御祈祷、看経如恒也[33]」とあるが、ここで「看経」いう言葉に注目したい。義持の時代には正誕生日に相国寺で一切経が転読されていたが、義政の時代になると「看経」とある。「看経」とは経典を暗誦もしくは諷経することである。そのため、厳密に言えば転経とは異なる。

文明12年（1480）、相国寺塔頭の勝定院で出された義政の誕生疏に

娑婆世界南贍部第日本国山城州万年山相国承天禅寺勝定院主比丘　等明
今月初二日　伏値
大檀那准三宮源朝臣　義政　誕生之辰
(脱)口命現前清衆、看経
大般若波羅蜜経
観音普門品
大悲円満無碍神咒、消災妙吉祥神咒、今当満散、諷誦
大仏頂、万行首棱厳神咒[34]

とあり、誕生日祈祷の際、『大般若波羅蜜多経』、『観音経』、『大悲円満無碍神呪』、『消災妙吉祥神呪』などが看経されている。また、『東山古文書』文明12年正月2日条に「相国寺勝定院僧等明文渕　大般若経等を誦して、義政の誕辰を祝し、福寿増進を祷る[35]」とある。即ち、文明12年正月2日の義政の正誕生日には、相国寺の塔頭である勝定院で同じく『大般若波羅蜜多経』などが看経されていたと考えられる。つまり、塔頭寺院などでは禅宗での儀式・法要でよく用いられる『大般若波羅蜜多経』や『観音経』などが看経され、本山である相国寺では一切経の転読が行われたと推測できるのではないか。

将軍誕生日祈祷については、資料などの不足によりその全貌が明らかにされていない。しかし、相国寺や南禅寺を中心とする禅宗寺院で、誕生日祈祷が盛大に挙行されており、畿内や地方にまで及んでいた可能性は否定できない。

ところで、足利将軍家のために誕生日祈祷が行われた頃より、一方では朝鮮に大蔵経を要請するようになった。相国寺には応永31年（1424）1月に、密教大蔵経及び註華厳経の両版木と共に大蔵経が贈られ奉安されている[36]。この大蔵経と密教大蔵経の版木などには、「遂與圭寿等五月二十一日到京、館於城北深修菴、輸蔵経與木板、置于相国寺[37]」とあり、その年の5月21日に相国寺に奉安されたことが確認できる。日本国王の使僧として朝鮮に渡った圭寿は将軍の命で大蔵経を要請したが、相国寺で行われた足利義持の誕生日祈祷は応永29年（1422）と同30年（1423）の2月であり、そのための要請であったかは不明である。ただ、応永28年（1421）までには、すでに3蔵の大蔵経が日本に伝来していることから、そのいずれかが相国寺に奉安された可能性は考えられる（【表1】参照）。また、南禅寺も文安5年（1448）に、日本国王の使僧として文渓正祐が大蔵経を要請していることは前述した

通りである。

このように、相国寺や南禅寺は、大蔵経の披閲[38]や伽藍の再興に際して大蔵経を懇願し下賜されるまでに至っている。その他建仁寺にも、1457年に足利義政によって大蔵経が奉安されている[39]。前述したように、これら寺院では将軍誕生日祈祷が行われていた。特に、相国寺ではその際に大蔵経を転読していたことから、他の寺院においても同様のことが考えられる。つまり、朝鮮への大蔵経の要請には、寺院の創建や再建という表面的な目的に加え、禅宗寺院で挙行されていた将軍誕生日祈祷での転読に使用するためという側面的な要素も存在したと考えられる。

Ⅳ. 江戸時代初期の大蔵経刊行と高麗版大蔵経

日本で最初に大蔵経の刊行に成功したのは、天台宗の天海による天海版大蔵経である。この大蔵経は天海が発願し、江戸幕府三代将軍の徳川家光（1604～1651）の援助を得て、寛永14年（1637）から慶安元年（1648）までの12年をかけて完成した。しかし、それ以前に宗存という高日山法楽院常明寺の僧侶が大蔵経の開版を発願し、京都の北野経王堂で着手している。その事業は慶長18年（1613）から寛永3年（1626）までの13年に及んだが、全蔵が刊行されるまでに至らなかった。この大蔵経を宗存版大蔵経（以下、宗存版と略称）と言う。宗存は慶長18年（1614）9月に高麗版の『大蔵目録』3帖を刊行し、これを出版予定目録として大蔵経の刊行を開始した。宗存版の装丁には、折本（経典・講式）、袋綴本（天台典籍）、巻子本などがある。そのうち、折本の版式は1行が14字詰ないし15字詰で1張が22行、もしくは1行が17字詰で1張が23行であり[40]、巻末に「○○（甲辰などの干支）歳日本国大蔵都監奉/勅雕造」の刊記があることから、高麗版の形式に倣っていると見られその関係性が指摘されている[41]。

そこで、宗存が大蔵経を開版する前に刊行した『一切経開板勧進状』の内容を検討し、宗存版の刊行目的や高麗版との関係について検討する。

1．宗存の大蔵経刊行の目的

宗存の大蔵経刊行に関する内容が『一切経開板勧進状』に記されているので、その内容を見ることとする。

敬白　　勧進沙門宗存

特請蒙十方檀那助成、①開梓写一代蔵経、奉納内外両太神宮之内院、常明寺為鎮護国家之霊場、令満二世大安楽願望、状云、夫以、和光同塵結縁之始、八相成道以論其終矣、然則結縁利物之春花、薫曲願万機園、説法成道之秋月、照随宜益物之袂、故内外両大神宮、外雖隔仏法、内崇敬経巻、固茲、法楽之祝言、祭礼之御秡、経呪陀羅尼之言句也、加之、②両宮共安置大蔵経、専雖備神道増威之法味、近年令退転不残一蔵、見此聞彼難止悲歎、貧妨諸道有志

無レ遂、併天下静謐時、国土豊饒節、君有二仁徳一臣行二忠信一頼哉、仰二一部一巻之奉加、一紙半銭之助成一、遂二蔵経開板摺写大願一、③書写者展転而有二落損字闕減之句一、摺写者校合而無二落損字闕減之句一、所謂欲レ備二末代諸宗亀鏡一、挑二巨夜長灯一、普流二布天下一、広利二益衆生一、伝聞、天帝者依二般若之威力一、遁二頂上王之難一、普明王者酬二八偈之講釈一、免二斑足王之害一、加之、中天竺摩竭陀国俱博婆羅門者、依二随求陀羅尼之一字功力一、忽変二地獄一成二浄土一、大唐之慈童者、受二持普門品二句偈一、保二八百余歳寿齢一、日本役行者、受二持孔雀明王呪一、得二飛行自在一、其外三国伝来之諸祖、精進勇猛之緇素、経呪陀羅尼之奇特霊験、不レ可二勝計一、一偈一句之功猶深、況於二一部一巻一乎、一部一巻徳尚広、況於二一切経満足一乎、若尓者、結縁助成之貴賤、奉加施入之道俗、現世者神道納受故、福禄寿位如意満足、子子孫孫代代繁昌、当来者諸仏歓喜故、十方浄土随願意成等正覚、仍如件

伊勢太神宮　　一切経　本願　常明寺
慶長十八年暦正月吉日　　勧進沙門敬白[42]

下線部①では、大蔵経開版の目的が語られている。即ち、十方の檀那の助成を受け、大蔵経を開版して伊勢神宮の内宮に奉納することが目的である。伊勢内宮の宮寺である常明寺は鎮護国家の霊場であり、そこに大蔵経を奉納することで現世来世の二世にわたって安楽を得ようとしていた。

下線部②では、伊勢神宮で以前から経典を読誦していたことが語られている。即ち、伊勢の内外両神宮では内面は経巻を崇敬しており、法楽の祝言や祭礼の祓いで陀羅尼を唱えていた。以前は内外両宮に大蔵経が安置され、神道の神力が増す儀式を行っていたようであるが、それを失い嘆いていた。伊勢神宮に大蔵経がなくなって以降、それを開版する志はあったものの遂行できない状況であったが、最近になり世の中が静謐を取り戻し、これを実行しようとしていた。

伊勢神宮に大蔵経がいつ奉納され、いつまで存在していたかは不明である。しかし、建長元年（1249）には、前太政大臣であった西園寺実が家伝の宋版『大般若波羅蜜多経』600巻を伊勢神宮に奉献して転読をさせている。その目的は、彼の娘である大宮院姞子がのちの深草・亀山天皇の生母となり、西園寺家と天皇家に姻戚関係ができたため、天皇の向後の安穏を祈るものであった[43]。伊勢神宮は国家鎮護の最高神として日本全国からの参拝や崇敬を受けていることから、宗存も伊勢神宮に大蔵経を奉納し、神道の儀式を行うことで国家を護ろうとしていたと推測できる。

2．現存経典での高麗版大蔵経との比較

さて、下線部③には、大蔵経を書写すると文字は一定せず書き損じなどが生じる可能性があるが、校合し正して印刷すればそれが生じないとある。そうすることによって、末代まで諸宗の手本となる経典を備えることができると考えたのではないか。そこで、現存する宗存版の中から4つの経典を、底本である高麗版と比較した。その結果を簡単に整理すると、以下の通りである。

1）『舎衛国王夢見十事経』（国立国会図書館蔵）
版式：1行14字詰　折本　「乙卯歳（1615年）大日本国大蔵都監奉勅雕造」の刊記あり
宗存版と高麗版の文字の異同　高：縄　為　烏　勑　悪　棄
宗：繩　爲　象　勅　惡　奪
宗存版に使われている「繩」「爲」「象」「惡」「奪」などは基本字であるが、高麗版は交換略字や古字である。但し、高麗版では「勑」のみ基本字を使用している。文字の異同はあるが、経典の内容は変わらない。

2）『仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経』（国立国会図書館蔵）
版式：1行17字詰　折本
文字の異同　高：殑　最　為　尊　面　夭　等
宗：兢　最　爲　尊　面　夭　等
（「最」「夭」「等」は高麗版で、「爲」は宗存版でそれぞれ基本字を使用）

3）『大般若波羅蜜多経』巻第16（本證寺蔵）
版式：1行17字詰　折本
文字の異同　高：虞　為　陁
宗：處　爲　陀（※宗存版はすべて基本字を使用）

4）『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』（龍谷大学図書館蔵）
版式：1行17字詰　折本　「丁巳歳（1617年）日本国大蔵都監奉勅雕造」の刊記あり
文字の異同　高：為　虞　陁　刹　哉
宗：爲　處　陀　刹　哉（※宗存版はすべて基本字を使用）
特徴：2～4張に「鼓音声王経　第二張　讃」の柱題（版首題）あり

宗存版と高麗版では経典の内容が変わるような大きな違いは見られなかったものの、双方で使われている漢字が異なる。4点に共通する漢字では「爲」、その外にも「處」や「陀」は、宗存版では基本字を使っている（下線部の漢字が基本字）。また、『仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経』を除いて、宗存版は基本字を多く使用している。高麗版には7,489種29,478字の異体字・別体字が使われていると言うが[44]、宗存版はそれを踏襲しているわけではないことが確認できる。

ところで、『仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経』には、基本字以外の漢字が双方で使われている。それ以外にも、第2張4行目以降の陀羅尼の漢字とその数が異なっている。陀羅尼部分の漢字の異同に関しては、異体字や同音異字を使っている場合があり、底本である高麗版とは異なる部分がある。さらに、陀羅尼の数は宗存版が25個であるのに対し、高麗版

は26個である点も異なる。

では、どうして漢字の異同や同音異字が生じ、陀羅尼の数が異なるのか。実は、宗存は室町時代の刊本『金光明最勝王経』を所持しており、その紙背には21部の経典が書写されていた。その中には、『仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経』や『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』も含まれている。前者には「慶長十七壬子十二月廿日夜二条御幸町逗留之時宗存書之」、後者には「山城国八幡宮一切経蔵借用京洛二条写之」とそれぞれ書かれていることから、宗存は慶長17年（1612）に山城国石清水八幡宮の一切経蔵から上記の諸経典を借用し、京都の二条御幸町でそれらを写したことが確認できる[45]。これら21部の経典が、宗存版として刊行されていることは興味深い[46]。

そこで宗存版と高麗版、石清水八幡宮旧蔵即ち現在の宮内庁図書寮文庫所蔵の福州東禅寺覚院及開元禅寺版大蔵経（以下、宮内庁宋版と略称）の三種類の大蔵経で陀羅尼部分を比較した結果、高麗版と宗存版の一致は11個、3本一致は9個ある一方、宗存版と宮内庁宋版との一致はない。陀羅尼部分においても宗存版は基本的に高麗版に倣っているが、稀に宮内庁宋版に倣っている点も見られる。特に、宗存版25番目の陀羅尼は、宮内庁宋版が25個であるのを倣い、高麗版の25番目と26番目を一つにまとめたようである（【表2】参照）。

漢字の異同や『仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経』に見られる陀羅尼の数の違いから、宗存は慶長17年に書写した21部の経典と高麗版とを校合していたのではないか。宗存版が高麗版だけを底本としていたなら、『仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経』は『舎衛国王夢見十事経』と同様に漢字の異同のみであったはずである。また、『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』で比較すると、宗存版と高麗版は陀羅尼の数は53個であるが、影印の磧砂版大蔵経（以下、磧砂版と略称）では52個であった。このことから、『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』は高麗版と宗存が書写したそれとで相違がなかったと考えられる。つまり、下線部③に関しては、一部ではあるものの経典を校合していたと考えられる。

Ⅳ. おわりに

室町時代の日韓仏教交流は、大蔵経を中心としていたといっても過言ではない。それほど、日本側は多岐にわたり大蔵経を要請しており、朝鮮時代の仏教政策とも咬み合い、結果として44蔵（中国の大蔵経も含む）が日本に伝来した。

室町時代の日韓関係に関する史料を見る限り、日本側の大蔵経要請の理由は、寺院の創建や再興のために伽藍を整備し、経蔵を建立して大蔵経を奉納することであった。そこで、室町時代と江戸時代初期の高麗版の活用事例を見てみると、北野社一切経の底本として活用されていたこと、将軍誕生日祈祷で転読されていたこと、宗存が高麗版を底本とし、さらに内容を校合して新たに大蔵経を刊行しようとしていたことなどが確認できた。特に将軍誕生日祈祷は、単に将軍の誕生日を祝うだけでなく国家の安寧をも祈願していたことは、

高麗版が持つ護国思想との関連性が窺える。また、宗存の大蔵経刊行の目的からも、底本に善本として誉れが高い高麗版を選ぶことで、さらなる校合により末代まで諸宗の手本となるものを備えようとした意図が感じられる。そうであるなら、忍澂以前からも高麗版は善本として高く評価されていたのかもしれない。どちらにしても、江戸時代のこのような評価によって、近代の大蔵経が高麗版を底本として刊行されたことを考えると、室町時代における日韓の仏教交流の意義は大きいと言えるのではないか。

ところで、高麗版に関する日本側の研究成果は、1900年初頭から現在に至るまで141点の論文や本が発表・刊行されている（2014年現在）。一方、韓国側の研究成果は、1918年の李能和『朝鮮仏教史』「大法宝海印大蔵経板」に始まり、現在に至るまで314点の研究論文や単行本が発表・刊行されている（2014年現在）。その数を比べてみると、圧倒的に韓国側の研究が多い。高麗版に関する研究は、1950年以前はほとんどが日本側の研究成果を占めていたが、それ以降は韓国側によるものが増えている。これは、1962年12月20日に海印寺所蔵の大蔵経版木が韓国の国宝第32号に指定されたことが契機となっている。大蔵経を保存するために1960年代から1970年代にかけて二種類の影印本が出版され、さらに1995年には版木が納められた海印寺の大蔵経板殿が世界文化遺産に、2007年には世界記憶遺産に登録されるなど、韓国で文化財に対する意識が高まるにつれ、その研究に一層の拍車がかかったものと思われる。また、2011年に「高麗大蔵経の千年記念」として、韓国では大蔵経関係のシンポジウムや祭典が多く催され、さらに注目を浴びるようになった。

日本では1950年以降、中国の諸大蔵経や高麗版が重要文化財に指定されたことや秘蔵化により閲覧が容易でなくなったこと、戦後齎された敦煌文献の整理に大きなウェイトが占められたことで、大蔵経全体の研究が減退した。

日韓での高麗版をとりまく研究の成果と環境の変化を見ると、奇しくも50年前頃から逆転してしまったように思える。大蔵経研究に携わる者として、韓国側の研究成果は無視できない存在となっている。これは大蔵経に限らず、日韓両国の仏教についても言えることであり、今後の仏教研究の相互発展に期待したい。

【表2】『仏説一切如来金剛寿命陀羅尼経』陀羅尼部分の比較

高麗版大蔵経	宗存版大蔵経	東禅寺覚院及開元禅寺版大蔵経
怛𠮷他一	怛𠮷他一	怛你也二合去引陀一
者犁二	者犁二	者犁二
者擺　者犁三	者擺者犁三	者擺引者犁三
弥娜知薩嚩二合 薩底二合 稽四	弥那坦薩嚩薩底二合 稽四	尾娜胝薩嚩二合薩底二合稽四
斫訖浪二合 藥南五	斫訖浪二合　藥南五	斫訖浪二合藥喃五
鉢囉二合　舍滿都薩婆路誐六	鉢囉二合　舍滿都薩婆路誐六	鉢囉二合　舍滿都六
薩婆薩怛嚩二合 南七	薩婆薩怛嚩二合　南七	薩嚩路引誐薩嚩薩怛嚩二合　南七
阿娜餘八	阿娜餘八	阿娜餘知解反八
俱娜餘九	俱娜餘摩訶娜餘九	俱娜餘九
遮嚩遮嚩十	遮嚩遮嚩十	摩賀娜餘十
係麽澆牛繞反　哩十一	係麽澆牛繞反　嘿十一	者嚩者嚩係麽澆哩十一
係麽你鋌尼十二	係麽你鋌尼十二	係麽你鋌尼去十二
係麽尸棄十三	係麽尸棄十 ※1	係麽尸棄十三
矯囉微十四	矯囉微十四	矯囉微十四
矯囉迷十五	矯囉迷十五	矯囉謎十五
係俱囉微十六	係俱囉微十六	係俱囉微十六
俱囉喇十七	俱囉犁十七 ※2	俱囉喇十七
俱麽底十八	俱麽底十八	俱麽底十八
微捨麽泥十九	微始麽泥麽泥十九	微捨麽抳麽抳十九
戍戍毗嚩二十	戍戍毗嚩二十	戍戍毗引嚩二十
阿者犁二十一	阿者犁二十一	阿者犁二十一
弥者犁二十二	旅者犁二十二	彌者犁二十二
麽尾覽麽二十三	麽尾覽麽二十三	麽尾嚕麽二十三
戶毛戶毛二十四	戶毛戶毛二十四	戶暮戶暮二十四
唵二十五	唵麽折羅諭師某甲二十五 薩嚩訶	唵嚩囉二合諭囉某甲薩嚩二合賀引二十五
麽折囉諭師某甲二十六 薩嚩訶		

※1には「十三」、※2には「十七」と入る予定であったと考えられる。

---

[1] 高麗版大蔵經の日本伝来については、菅野銀八,「高麗大蔵経に就て」(関野貞『朝鮮美術史』、朝鮮史学会、1932年)、拙稿「高麗大蔵経の日本伝存に関する研究」『韓国宗教』27、2003年などを参照。

[2] 大蔵経対校の集大成として対校録が刊行された。この対校録は、校異を出版した校正部と黄檗版大蔵経になく高麗版に入蔵されている典籍を載せた欠本補欠部の二種類が収録されている。この対校事業については、佛教大学仏教文化研究所編『獅谷法然院所蔵 麗蔵対校黄檗版大蔵経並新続入蔵目録』(1989年)を参照。

[3] 『太宗実録』14年7月壬午条。

[4] 『世宗実録』4年11月戊寅条。

[5] 『世宗実録』5年12月壬申条。

[6] 『世宗実録』30年4月壬午条。

[7] 『世祖実録』2年3月甲申条。

[8] 『世祖実録』8年10月庚午条。

[9] 『成宗実録』18年4月乙未条。

[10] 『成宗実録』22年8月戊申条。
[11] 文化庁文化財保護部美術工芸課『北野経王堂一切経目録』、1981年。
[12] 湖州の思渓（現在の浙江省呉興府）で、この地方の豪族であった王永従一族が開版したもので、南宋紹興2年（1132）にその雕造が始まった。この版木は王氏の菩提寺である円覚禅院に置かれたので「円覚蔵」とも呼ばれる。後代になり、この寺院は法宝資福禅寺と改められたが、刊記の中には資福禅寺版経と書かれたものもあり、後に追加されたと考えられている。小笠原宣秀『講座仏教　中国の仏教』4（大蔵出版、1979年、219頁）参照。
[13] 臼井信義「北野社一切経と経王堂——切経会と万部経会—」『日本仏教』3号、1958年、40頁。
[14] 文化庁文化財保護部美術工芸課、前掲書、8頁。
[15] 明徳の乱（1391年）で亡くなった山名氏清をはじめとする多くの人々の霊を弔うため、将軍足利義満が戦場であった内野で大施餓鬼会を行った。その開催を奉行し、道場である経王堂を管理していたのは、覚蔵坊増範であった。
[16] 『太宗実録』11年10月己亥条。
[17] 『太宗実録』11年12月丁亥条。
[18] 大蔵会編『大蔵会展観目録』、文華堂、1981年、32頁。
[19] 『成宗実録』成宗18年7月丙子条、『成宗実録』20年9月壬午条、『文宗実録』文宗即位年12月癸未条など参照。
[20] 細川武稔「禅宗の祈祷と室町幕府—三つの祈祷システム—」『史学雑誌』113巻12号、2004年、53頁。
[21] 『慧山古規』正月21日条。
[22] 細川武稔、前掲論文、49頁。
[23] 『蔭凉軒日録』文明18年12月20日条。
[24] 『鹿苑日録』天文5年2月28日条。
[25] 『蔭凉軒日録』延徳4年7月27日条。
[26] 細川武稔、前掲論文、49頁。
[27] 原田正俊によれば、堺の海会寺（十刹）でも誕生日祈祷が行われたことから、五山十刹諸山をすべて集めて全国的に祈祷が行われていたと指摘している（原田正俊「五山禅林の仏事法会と中世社会—鎮魂・施餓鬼・祈祷を中心に—」『禅学研究』77号、1999年、82頁）。
[28] 『満斎准后日記』応永29年2月11日条。
[29] 『満斎准后日記』応永30年2月11日条。
[30] 原田正俊、前掲論文、79～80頁。
[31] 『夢中問答』上、15（加持祈祷の真意）。
[32] 『蔭凉軒日録』永享9年6月13日条。
[33] 『蔭凉軒日録』寛正5年正月2日条。
[34] 今泉淑夫「内閣文庫所蔵『東山古文書』小考」、皆川完一編『古代中世史料学研究』下巻、吉川弘文館、1988年、449～50頁。
[35] 『東山古文書』文明12年正月2日条。
[36] 『世宗実録』6年春正月乙酉条。この前年の12月に、日本国王の使臣として僧圭寿らが大蔵経の版木を求めている。大蔵経の版木は一部しかないと断られ、その代わりに密教大蔵経の版木・註華厳経の版木が回賜された（『世宗実録』5年12月壬申条）。
[37] 『世宗実録』6年12月戊午条。応永31年（1424）に圭寿らは朝鮮の回礼使と共に帰国して5月に京都に入り、相国寺に大蔵経と密教大蔵経などの版木を置いた。
[38] 『世宗実録』4年11月己巳条。
[39] 『世祖実録』3年5月戊子条。
[40] 小山正文「林松院文庫の宗存版」『歴史と仏教の論集：日野照正博士頌寿記念論文集/日野照正編』、自照社出版、2000年、305頁。
[41] 禿氏祐祥「高麗本を模倣せる活字版大蔵経に就て」（『六条学報』227号、1920年）、斎藤彦松「宗存版の研究」（『同志社大学図書館学会紀要』3号、同志社大学図書館学会、1960年）、小山正文「宗存版一切経ノート」（『同朋仏教』20・21号、1986年）。
[42] 広隆寺蔵『一切経開板勧進状』（滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『延暦寺木活字関係資料調査報告書』、2000年、241頁）。
[43] 中野遠平「神宮法楽大般若経蔵について」『三重—その歴史と交流—』、雄山閣、1989年、258～9頁。
[44] 李圭甲編『高麗大蔵経異体字典』高麗大蔵経研究所、2000年、22頁。
[45] 長沢規矩也編『日光山「天海蔵」主要古書解題』、日光山輪王寺、1966年、37～8頁。小山正文「宗存の印刷事業とその活字」、滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『延暦寺木活字関係資料調査報告書』、

2000年、21頁。

[46] 21部の経典の中で2部は高麗蔵に未収録である。小山正文、前掲論文、1986年、431頁。